

消費者グループインタビュー調査結果概要

グループインタビューの中で、アンケート結果を補足する内容についてまとめる。

1 食肉を生で食べる行動について

- ・親が食肉を生で食べることを好む場合に、子どもと一緒に食べるとの回答があった。
- ・大人になって他者に勧められて食べ、おいしいと感じて生で食べるようになったケースが多かった。

2 都からのカンピロバクター食中毒に関する説明に対する質問

- ・被害発生は時期によって違いがあるのか。
- ・鶏がもともと持っているのに、最近になって食中毒が増えているのはなぜか。
- ・生で鶏肉を出す店をなぜ取り締まれないのか。
- ・食べたら 100%発症するのか。食べる量によって発症率が変わるのか。
- ・都内の食中毒発生件数が 42 件というのは、発症率は低いということではないか。
- ・ノロウイルスやO157 と比べて、カンピロバクターによる食中毒はニュースになっていないように思うがなぜか。
- ・生で食べても大丈夫な肉はないのか。

3 都からカンピロバクター食中毒に関する説明を受けての感想

- ・食中毒は、運の悪い人がたまたまかかるもので、自分になったとしても、その時はその時のことだと思う。
- ・食中毒の被害は主に外食で出ており、消費者が予防できる範囲にも限度がある。提供者側が安全な食肉を提供するよう規制を厳しくするなど、何らかの働きかけを行うのが最も効果的だと考える。
- ・カンピロバクターについて聞いたことがある人はいたが、鶏肉に付着していることや、食中毒が増えているという情報はほとんど知られていなかった。
- ・カンピロバクターの情報を伝達する必要性については、ほとんど異論はなかった。被害の程度がたいしたことがないのなら、それほど情報伝達に躍起になる必要もないという声もあった。

4 都が提示した情報についての評価

- ・原因施設で居酒屋が多いという情報は、インパクトがある。
- ・食中毒の件数については、むしろ少ないという印象を持つ。
- ・最悪のケース（被害例）を示した方が目を引く。
- ・細かいデータなどは、詳しく知りたい人がわかるようにしておけばよい。
- ・体験談のような、よりリアルな情報の方がいい。

5 説明を聞いた後の態度の変化について

- ・食肉を生で食べている人のうち、食行動を変える意思を見せたのは9人中2人で、いずれもそれほど好んで食べているわけではなかった。
- ・子どものいる人では、今後も食べるとしながらも、「あまり子供にはすすめないようにしたい」というような意識の変化を感じさせる発言があった。
- ・情報を積極的に他者に伝えたいという態度を示したのは、食肉を生では食べない女性と食行動の変化の意思を見せた女性であった。

6 行政からの情報提供について

- ・東京都を含め行政機関からの情報を見ている人は少なかった。
- ・食の安全に関する情報を自分で調べたりするが、都のホームページを見ても情報がどこにあるかがわかりにくいという感想があった。
- ・情報が届きにくい若い男性に情報を伝達するための手段として出たアイデアのキーワードは「インターネット」と「インパクト」であった。インターネットのポータルサイトや検索サイトにインパクトのある見出しを設定し、興味をもった人たちがより詳しい情報を得ていくのが効果的という意見が、調査協力者の多くから聞かれた。